

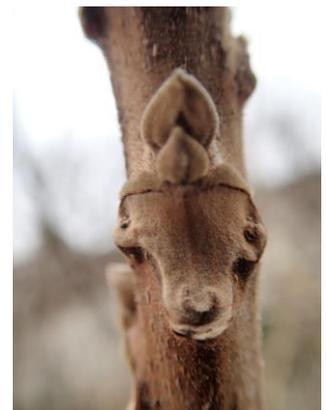
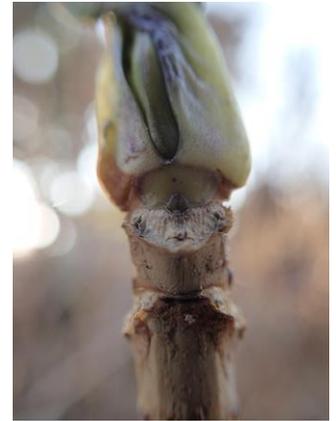
イノッチのシェアリングネイチャー NO152-48 2021.2.4

〈やあ、こんにちは！〉

野山の木々が葉っぱ落としたこの時期、冬芽に守られるようにかわいい顔が寒風にさらされている。葉が落ちた跡で葉痕と呼ばれる。顔に見えるつぶつぶは水分や養分が通った道の跡、言わば血管の跡だ。このほんわかした顔を森や公園の中で見つけると、お地蔵さん

に会ったようで、思わず「こんにちは、今日もいい天気ですね」などと声をかけたくなくなってしまう。木の種類が違えば当然顔も違うが、同じ木でも個性があって一つとして同じものはない。人の顔だって違うのだから当たり前なのだが。

ウサギに見えたり、ヒツジに見えたり、おサルに見えたり。泣いた顔、笑った顔、困った顔、……。見え方も千差万別、なんでもありだ。



顔だけでなく、自然の造形物を何かの形に見立てるのは人の意識、「あっ、こんな

ところにヒツジの顔があった！」と思った瞬間、それはヒツジとしてそこに存在する。気づかなければ、ただの木。同じように足元のアリやダンゴムシも「そこにいる」ことに気づかなければ、存在しないも同じこと。そうやって今までにもそのものの存在に気づかずやり過ごしてきた命の数々。幸せの物差しは人それぞれに違うが、散歩道で偶然見つけた顔に見えるものや、葉っぱの裏に隠れていた小さな虫などを見つけた時、幸せ度は跳ね上がる。同じ命あるもの同士としてシンパシーを感じるのかもしれない。